

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：32401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2015

課題番号：26870620

研究課題名(和文)戦後日本映画における児童観客の実態調査

研究課題名(英文)A Study on Child Spectators of Post-war Japanese Cinema

## 研究代表者

渡邊 大輔(WATANABE, Daisuke)

跡見学園女子大学・文学部・助教

研究者番号：50645629

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後の日本映画における児童の映画観客の映画受容の実態・動向を多角的に明らかにしたものである。さらに本研究では、そのために当時の観客や視聴者調査にまつわる言説群も参照した。1950年代から60年代にかけての児童映画観客の実態は、主に二つの劇場外の映像受容の文脈と密接に結びついていることが明らかとなった。第一に1920年代から活発化した「映画教室運動」や「学校映画会」と呼ばれる学校施設での映画上映、そして第二に国産のラジオドラマやテレビアニメーションといった新たな放送メディアとの関わりである。とりわけ本研究では、1960年代に国産テレビアニメが児童映画観客に与えた影響を分析した。

研究成果の概要(英文)：This study aims to discuss the various situations of child spectators, who began to experience a unique status of acceptance and discourse in the 1950-60s Japanese film industry. My analysis focuses on the discourse of audience surveys conducted in the 1950-60s. The situation of child spectators in the 1950-60s must be understood in the context of two “non-theatrical” phenomena: 1) the Educational Film Curriculum Movement (Eiga Kyoshitsu-undo) and film screenings held during school assemblies (Gakko-eiga-kai), and 2) the relationship between films and new broadcast programs, including domestic radio drama and TV animation. The educational film program concentrated on education for children beginning in the 1920s. By the 1950s, children frequently took in films in relation to radio programs. At the end of this study, I focus how Japanese cinema and Japanese TV animation within juvenile culture influenced each other during 1960s.

研究分野：日本映画史

キーワード：映画観客 児童 戦後日本映画 教育映画 テレビ アニメーション 1950年代 1960年代

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本映画史における「児童」の映画観客について論じた先行研究は、主に 2000 年代以降に見られるようになった。だが、それらの研究は、明治 40 年代や第 2 次世界大戦後の占領期など、ある特定の時代範囲に限られ、また、児童の映画観客それ自体が中心的な主題として検討されていないものが多かった。だが、近年の映画史研究において観客をめぐる歴史研究全体が活発化している。また、多くの先行研究が指摘するように、とりわけ日本映画史の黎明期において、小学生を含む児童が映画観客層の過半を占めており、彼らの映画受容の動向が日本映画の制度的・言説的確立の重要な一側面をも担っていたことが明らかになっている。以上から児童映画観客をめぐる多角的研究の必要性はますます重要なものになりつつある。

(2) 研究代表者はこれまで、日本映画史における「児童」の映画観客の成立過程について、観客研究・言説分析・作品分析など複数のアプローチを用いた多角的研究を続けてきた。(1) で示した経緯に基づき、研究代表者は児童の映画観客の映画受容の動向についての総合的・網羅的な研究を目指し、その最初の成果として、日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程の学位論文をまとめた。当該論文では、明治末期から昭和 10 年代半ばまでの戦前期において、当時の学校教育・社会教育を含む映画の教育利用活動としてのいわゆる「映画教育運動」との深い関わりの中から、児童が行政による統制管理と、映画という新興メディアの娯楽的な消費との間で重要な意味を担った存在として対象化されていった過程を明らかにし得た。その一方で、第 2 次世界大戦中期を経て、戦後の占領期から高度経済成長期にいたる戦後の展開についての検討まではいたることができなかった。だが、戦後の日本映画では、戦前までの児童に代わって青年層が映画の主要な観客層になる一方、マンガ、ラジオ、テレビアニメなど児童をめぐる文化状況が多様化していく時期にあたる。児童の映画観客の成立とその発展の過程を網羅的に明らかにするためには、これまでの戦前の事例に対し、戦後の事例を比較検討してみることが問題の所在をより明確にすることになる。

(1)(2) の経緯を背景として、本研究では、研究対象の時期を第 2 次大戦直後の占領期、そして独立後の高度経済成長期へと延長し、これまでの映画史と教育史が交わる研究領域に、新たにマンガやテレビをはじめとする戦後サブカルチャー史やメディア文化史などの周辺分野も加え、より多角的・包括的な児童観客をめぐる映画史研究を目指した。

## 2. 研究の目的

本研究では、映画史やメディア文化史、教育社会史などの観点から、戦後日本における「児童の映画観客」の映画受容の実態と歴史的展開の検討を目的とする。

一方で「児童」は成人と明確に区別される近代社会特有の対象であり、また他方で、映画もまた近代のメディア社会が生み出した典型的な視覚装置である。その意味で、「児童の映画観客」の実態の解明は、近代史研究それ自体からも大きな意味を持つ。しかし、当該の主題に関する総合的な先行研究は、現在、ほとんど存在しない。以上を踏まえて、本研究では以下の 2 点の目的を設定した。

(1) 本研究では、主に第 2 次世界大戦後の占領期から高度経済成長期に対象範囲を設定し、当該時期の児童の映画観客の実態について調査する。

(2) 映画史のほか、政治制度史(占領政策史など)、アニメーション史、マンガ史、児童文化史など周辺領域の資料と言説を多角的に参照・分析する。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究では、対象となる時期の児童の映画観客に関する文献資料・言説を国内の各種機関の調査などを通じて収集、カタログリングし、その内容を分析する。各種映画雑誌の他、映画教育雑誌『映画教室』『視聴覚教育』、児童研究雑誌『児童心理』のバックナンバーなどが主要な参照文献である。

(2) 児童の映画観客の実態調査に関連する、教育映画や国産アニメーション、マンガ、児童文学など関連諸分野の文献資料・言説についても国内の各種機関の調査などを通じて収集、分析する。

(3) 当該時期の児童が鑑賞していた映画・映像作品(とりわけ国産アニメーション作品)などを鑑賞し、その内容を分析する。

## 4. 研究成果

本研究の成果としては、主に以下の 5 点が挙げられる。

(1) 文献調査を通じた 1950~60 年代における児童の映画観客の規模の推移の分析、

(2) 文献調査を通じた 50 年代の児童観客の映画観覧の嗜好の分析、(3) 「教育的」な映画上映活動と児童観客との関わりの分析、

(4) 1950~60 年代にかけての放送メディア、とりわけ国産テレビアニメーションとの関わりの分析、(5) 50 年代の児童の映画観客と同時代の出版メディア文化との関わりの分析である。

(1) 国立国会図書館、大阪府立中央図書館国際児童文学館などの諸機関で閲覧調査した 1940 年代後半から 60 年代にかけての文献資料を総合し、1950 年代前後、及び 60 年代の児童の映画観客の規模や動向の推移を分

析した。調査の結果、各年代とも映画館観客数の統計データを児童の映画観客に特化して総体的に調査した基礎資料が存在しなかったため、各資料から窺われるおおまかな規模や動向の推定に留まった。その結果、50年代前後の児童の映画観客の占める割合が、観客全体の数%から1割余りであったと推定され、また、後半になるほど増加していった可能性のあることが明らかになった。また、

50年代ほどの具体的な統計数値は判明できなかったものの、60年代以降には(他の年代の観客と同様)児童の関心は映画から急速にテレビへと移行して観客数は減少していき、例えば49年の調査事例では、平均月約5、6回、55年には月3回以上映画館に行く児童が多かったのに比較して、60年代半ばには3~4ヶ月に1度しか映画館に行かなくなっていたという状況が明らかとなった。そして、

この児童の映画観客の減少には63年に開始された国産テレビアニメーションの爆発的な人気の広がりが大きく関わっていることがわかった。

(2)1950年代の児童の映画に対する嗜好を、各種統計調査を総合して分析した。これには主に全国各地の学校・教育関係者が、小中学校の児童を対象に実施したアンケート調査の記事を参照した。

まず、年齢的な特徴としては、およそ小学校2年生から4年生あたりを境にして、映画に対する関心や志向が変化している点が挙げられる。より具体的には、小学校低学年の児童ほど、アニメーション(漫画映画)や影絵映画といったジャンルを好み、高学年に近くなると、一転して、劇映画や文化映画(ドキュメンタリー)、ニュース映画などへの関心が芽生えてくる。また同じく、低学年ほど自分たちと近い「子どもが多く登場する映画」を好む傾向にある。

そして、男女別の特徴としては、これも予想されるように、男子児童には、時代劇や、西部劇、「ターザン映画」などの冒険活劇が、女子児童には、悲劇的な内容を含んだ「母の映画」や文芸メロドラマなどが主に好まれていることが明らかとなった。

(3)とりわけ大正期から昭和初期以降、映画を教育の目的に活用しようという映画教育運動が国内で活発に展開されていた。そうした中で、50年代初頭における年少観客の映画受容の主要な場の一つとして、「映画教室運動」や「学校映画会」といったイベントが機能していたことが明らかとなった。映画教室運動とは、主に戦後直後から50年代前半頃までを中心に推進されていた、学校児童の引率による映画館を主体とした映画教育運動(視聴覚教育)である。さらにこの運動は、49年2月に「教育映画配給社」(教配)

が設立され、教育関係者や識者の選定で、教育映画や児童映画、アニメーションなどが一番組につき8巻1時間内外のものを定期的に配給するようになったことで、1950年前後にかけて活発化していった。

例えば、『映画年鑑』の記載では、「映画教室運動」の項目が初めて登場した51年版の中で、教配が映画教室プログラムの編成、配給を開始した49年5月から12月までの映画教室及び学校映画会の観客動員数は、利用学校数延べ5320校、児童観客数320万3000人だった。戦後の映画教育運動の再開の中で、学校児童をはじめとする年少観客の重要な映画受容の場としてこうした「非劇場型」の映画上映があったことは注目すべきである。

(4)1950年代から60年代にかけて、次第に映画に代わって児童たちの主要な文化になったラジオドラマ、そして60年代以降の国産テレビアニメーションの受容の動向を分析した。本研究の当初においては、国産テレビアニメーションの調査はそれほど主要な研究対象ではなかったが、調査を進める過程で児童の映画観客の動向の変遷を考えるにあたり、重要な意味を持つことが明らかとなった。

まず、児童文化における映画とラジオとの関わりについては児童のラジオ視聴の実態に特化した基礎資料は現時点で確認できていないが、各種文献を比較検討した。例えば56年の雑誌『児童心理』に掲載された小学3年生を対象に実施されたアンケート調査では、すでにラジオを「いつもきく」と答えた学生が各学年、男女とも最も多かったのに比較し、映画は各学年、男女とも「ときどきみる」が最も多かった。このことから50年代から60年代における児童のメディア受容の移行が明らかになった。

そして、そのことは60年代におけるテレビの家庭への普及と国産テレビアニメーションの台頭に最も顕著に表れることになった。ここでもテレビ視聴者の動向を調査した映画雑誌、及び社会教育や視聴覚教育、児童心理学などの教育関連雑誌を調査・分析した。テレビに関しては、国産テレビアニメーション登場以前の50年代末から60年代初頭にかけては、海外製短編アニメーションや海外製テレビ映画、野球などのスポーツ中継が多く観られていたことが複数の文献から裏づけられた。さらに他方で、映画に対する児童たちの関心は急速に低下していることもわかった。こうして児童の関心が映画からテレビ番組へと急速に移行していく過程で、国産のテレビアニメーションの登場はさらにそれを加速させるものであったことが明らかとなった。それは児童向け映画の興業形態の変化とも密接に結びついていた。すなわち、60

年代半ば以降、「東映動画」などのアニメーション制作会社がテレビアニメーション作品を再編集して劇場公開するというイベントを開始し、これが児童たちの主要な娯楽となっていくからである。こうして 60 年代を通じて、児童を含む子どもたちの映像娯楽メディアの中心が、映画からテレビへ、その中でもとりわけ無数の国産テレビアニメーション番組へと一挙に集約されていく過程が明らかになった。もはや「斜陽化」が決定づけられていた映画界においても、「再編集版」のイベント興行という形で児童向け映画興行を再編していき、ますます彼らをテレビアニメーションへ向かわせる契機となっていた。以上の 60 年代の児童文化におけるテレビアニメーションの氾濫と浸透が、70 年代後半の青年層をターゲットにした「アニメ」ブームに繋がり、今日の「クール・ジャパン」へと至っていることを考えれば、この時代の年少観客・視聴者とテレビアニメーションとの関わりには、きわめて重要な意義があったと考えられる。

(5) 京都国際マンガミュージアム、大阪府立中央図書館国際児童文学館、国立国会図書館、国際子ども図書館などに所蔵される文献資料を閲覧調査し、50 年代における児童の映画受容と、それに関わる「マンガ」「絵物語」などの児童向けの出版文化との関連を検討した。その中から抽出される具体的な論点としては、年少の観客たちを低劣な文化から隔離すると同時に適切に善導していく「教育」からの視点や実践であり、当時、映画とともに新たな新興メディアとして注目を集めていたラジオなどとの間メディア的な関係性である。今回の調査の過程では、「映画」というメディアの形式的特性を自覚的に反映させる表現を伴った興味深いマンガ作品の事例なども発見した。例えば、1948 年に青井昌子が描いた赤本マンガ『ラッキーマサちゃん撮影所大暴れ』は、主人公は映画製作の現場である撮影所を舞台に活躍するアクションものだが、このマンガの作画表現自体が当時のマンガにもすでに見られたように、映画のスタッフロールなどを模した表現が取り入れられており、当時の児童の映画とマンガとの間メディア的な感性や認識を窺い知る資料となっている。また、その点は 1950 年の倉金章介『野球漫画映画ブック ベンチくん』においてさらに顕著に顕れている。この作品は冒頭において、主人公のベンチくんの物語が、それを映画として映画館のスクリーンで鑑賞する子どもたちの様子とともに示されるという多層的な構造をとっている。16 頁の短編漫画だが、漫画、映画、写真、ラジオ、電話……と間メディア的な入れ子構造や仕掛けに満ちた作品である。

以上のような成果を踏まえて、本研究の国内外における位置づけとインパクトを説明する。日本映画の歴史において、児童の映画観客はとりわけその黎明期から大正期頃にいたるまで、映画興行のドミナントな観客層を担っていたが、戦後の 1950 年代には、10 代の若者観客層が台頭し、こうした年少観客たちは急速に映画興行における主要な観客層ではなくなっていった。しかし、日本映画に関わる観客史研究の巨視的な連続性の中で、この時期の児童観客の動向や実態を跡づける作業は、教育社会史や児童文化史との関連からも、きわめて有益である。とはいえ、当時の状況を観客論的な視点を中心にして検討した先行研究は、管見の限り、まだほとんど存在していない。なおかつ、年少観客の映画受容に特化して扱った研究は見当たらない。

本研究は、戦後日本の年少の映画観客がどのように映画を受容していたのかを、当時の文献資料に掲載された統計データやアンケート調査などを中心に参照しながら考察した。さらにその上で、そうした児童の映画受容における固有の事例として、戦前から継続する「教育活動」、そしてラジオ、テレビといった放送メディアとの関係において捉えた。この時期の児童の映画観客の映画受容の実態を複数の分野の文献資料から総合的に精査した先行研究は国内外にもほとんど見当たらない。また、研究代表者がこれまでも取り組んできた戦前の事例も含めて、明治末の映画の渡来期から戦後の 60 年代に至るまでの長期間に及ぶ調査研究もほぼ存在していない。この点で、本研究は日本映画史やメディア文化史研究における今後の観客史研究や児童文化史などの進展にも重要な意味を持つ。

今後の課題としては、当初、計画されていた『映画教室』『視聴覚教育』『放送教育』などの児童観客関連の雑誌文献の精査とカタログリングを引き続き行う。また、明治大学現代マンガ図書館、杉並区アニメーションミュージアムなどの関連施設の調査を継続して行っていきたい。さらに今回の調査研究で、60 年代の児童の映画観客にとって国産テレビアニメーションの浸透がきわめて大きな意味を持つことが明らかになった。この時期の児童におけるテレビアニメブームが 70 年代の青年層におけるテレビアニメブームをもたらしたという経緯を踏まえると、本研究の成果を戦後から現代に至る日本アニメーション史研究に接続し、戦後の児童向けの映画から今日の「クール・ジャパン」に繋がるアニメブームまでを、具体的な作品の鑑賞の分析を含めて、観客史的な観点で捉える作業を行っていきたいと考える。

<引用文献>

- 天城良平、児童は映画をどう見たか  
小学六年生の実態調査、映画教室、第 3  
巻第 8 号、1949、25～27  
石原京三、調査 学童における映画興味  
の実態、児童心理、第 10 巻第 4 号、金  
子書房、1956、363～368  
磯山浩、子ども映画の貧困をつく、キネ  
マ旬報、第 373 号、キネマ旬報社、1964、  
26～30  
映画教室運動、池田雄蔵編、映画年鑑  
1951 年版、時事通信社、1951、77  
松村康平、児童の要求と映画・ラジオ、  
児童心理、第 10 巻第 4 号、金子書房、  
1956、11～18

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

[雑誌論文](計 2 件)

- 渡邊大輔、1960 年代日本アニメーション  
における児童観客・視聴者の受容動向、  
跡見学園女子大学文学部紀要、査読有、  
第 51 号、2016、147～161  
渡邊大輔、「観客の時代」の子ども  
1950 年代日本映画における年少観客の  
受容動向と観客調査、演劇研究、査読有、  
第 38 号、2015、55～71

[学会発表](計 1 件)

- 渡邊大輔、1950 年代日本の年少観客の映  
画受容をめぐる出版メディア文化との比  
較——「教育」と「消費」のあいだで、日  
本映像学会第 35 回映画文献資料研究会、  
2014 年 12 月 20 日、日本大学芸術学部  
(東京都練馬区)

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡邊 大輔 (WATANABE, Daisuke)  
跡見学園女子大学・文学部・助教  
研究者番号：50645629